

「在地性」の視点から農山村を考える

藤村 美穂

(佐賀大学)

食の問題については、残留農薬や食品添加物の問題から、産地や流通経路の不透明さまで含めて、さまざまな問題が続出している。このような状況のなかで、人びとは、自分たちの食べ物について、漠然とした不安を抱いている。その一方で、食べ物を共有する側、すなわち農を営む人びともまた、農業のあり方や自分たちの暮らし方について不安や怒りを感じている。

本稿では、この漠然とした不安や怒りに焦点をあて、「食と農」がいかなる意味で環境問題であるのかについて、農山村の暮らしのなかから描き出す試みである。その際、注目したのは、農業が、自然と直接的にかかわる営みであるという点である。自然とのかかわりについては、資源管理や農地保全など、さまざまな文脈で語られているが、本稿では時間という変数によってそれを表現する試みである。

キーワード：在地性、資源管理、時間

1. 問題の所在

1.1. 食をめぐる不安

本稿の目的は、農山村で暮らす人びとのもつ、漠然とした不安や怒りの在り処について考えることである。グリーンツーリズムや有機農業など、都市と農村、あるいは生産者と消費者の利害が調和した活動に注目が集まる一方で、「ただ、農山村で普通の暮らしを続ける」ことの意味についても、考えておきたいからである。

わずか50年ほど前までの日本は、自然的・社会的条件の変化によって手に入る食物の量が大きく左右され、ただ満足な量を食べるために多大な労力を費やさなければならなかった。たとえば、戦争による農村の労働者不足と冷害が重なった第2次世界大戦終戦直後の都市の1人1日当たりの熱量は、とうてい健康な肉体を維持できる水準ではなく、食べ物の恨みから殺人事件も起きるほどであったという（岸、1996：14）。また、多くの山村では、昭和初期までは、「食べ物と言えば、麦やとうきびご飯で米は3分の1位しか入っておらず、おかずは味噌や漬物、梅干しばかり」（宮崎県諸塚村）という状況で、戦中戦後は、山からとってきた草の根等を加工してやっとならえをしのいでいたという（和歌山県龍神村）。

このような状況から考えるなら、どのような奥地でも簡単に米や肉が手に入るようになった現在の日本の社会は幸福だといえることができる。にもかかわらず、現在、日本人の多くは自分の食生活に疑問や不安をもっている。残留農薬や食品添加物による中毒、BSEなど、つぎつぎに出

てくる問題にたいする国の制度への不信もある。しかし、このような具体的な問題が見えなくても、人びとは自身の食生活にたいして漠然とした不安を抱き、「豊かだがイライラし、根源的な不安を感じている」（徳野，2002：39）。それはなぜだろうか。

この問いにたいして農村社会学者の徳野が導き出した答えが、「生命・生活原理と経済原理の対立構造」（徳野，2002：47）の存在である。つまり、農産物や食品は、政治経済の文脈で考えるなら、国民の食料（量としての）であったり貨幣価値をもった生産物（商品）であるが、その一方で生身の人間である消費者や生産者にとってそれは「食べ物」＝生命の糧でもある。本稿の関心に引き付けていうなら、人間は身体をもった生物であるとともに文化や価値観をもって社会生活を営む存在であるかぎり、食べ物を得る（食べる）という行為もそれら全体を含めた生活のなかに埋め込まれた行為であり、量や安さの追及という経済的動機のみにもとづいて行われているわけではない。にもかかわらず、それらの違いを認識しないで政策をうつなら、現実と乖離し、人びとの不安に応えることはできないばかりか、食や農の現場がかかえるいかなる問題にも実効性をもたない空論に終わってしまうと徳野はいうのである。

1.2. 農山村の怒り

食べる側の不安が高まる一方で、「食べ物」をつくる側、すなわち農林業で生きてゆくことを選んだものたちもまた、現在の暮らしや農林業のあり方に不安や怒りを覚えている。

九州山地のほぼ中央部にある阿蘇は、火山灰のやせた土壌であったため、古くから草原の草や牛馬を用いての農耕を行ってきた。それが独特の草原景観を生みだし、熊本から車で1時間という地の利もあって、古くから観光地でもあった。その阿蘇の村では、1970年代に農業を継ぐと村に戻ってきた青年は、小学校時代の同級生が1人も農業を継いでいなかったことに驚いたという。そのような状況は、70年代だけに終わらず、息子も後を継がないし、農業では暮らしてゆけないという消極的な理由で老人たちが農地を手放してゆくという状況が現在にいたるまで続いている。

青年が農業を継ぐと決心したときは、「農業はお天道様だけに左右されながら自由に生きることができる仕事だ」と考えていたという。しかし、始めてみると、仲間の減少をくい止めたり、借金の返済をしたり、農協を通じた農政の指導にふりまわされる日々の連続で、いつまでたっても「余裕のある暮らし」にならない。彼は、特定の信念や思想にこだわった哲学百姓ではない。ただ、普通に農業をして楽しく生きることさえできない世の中になったことに、何ともいえない憤りや危機感を覚えるというのである。

さらに、九州山地を南下すると、農業をするにも都市に通勤するにもはるかに厳しい山村の世界が広がる。その1つ、宮崎県の諸塚村は、高度1000メートル近いところに88の集落が散在する山村であり、現在においても住民の大半は林業を合わせ営む農家である。かつては焼畑や狩猟のほか、林業や運搬などの臨時的な賃労働も含めた多様な営みによって生計をたててきた。戦後、「林業立村」を掲げた村行政の指導もあって、山林・椎茸・茶・畜産の4部門の複合経営を推進するシステムをつくりあげ、昭和60年までは経済的にも成功していたという。

しかし、近年になって、木材ばかりか椎茸の価格も下がり続け、人びとは山村で生活することの苦しさを実感している。山が退職金だと思って植林してきた人びとは、木材価格の低下によっ

藤村：「在地性」の視点から農山村を考える

てそれもあてにできなくなっているのである。

集落の小さな祭りや行事で顔をあわせるたびに、男性たちは、酒を飲みながら農林業の動向や村の事業のこと、あるいは身近な生活環境のこと、村政のあり方について何時間も議論をついやす。そして、客人を前に、山（この地）で生きる決意や喜びを語ると同時に、「第1次産業とか、こんなところの暮らしの大事さを誰もわかっていない。田舎はバカにされている」「世の中は拝金主義になりすぎている」という怒りの言葉を表現するのである。彼らはいったい何に怒り、何を守ろうとしているのだろうか。

2. 農山村の暮らし

2.1. 相対的不平等

さしあたりの生活が保証されたうえでの農山村の苦境や怒りについては、都市とのあいだの相対的貧困という文脈で論じられることが多い。

たとえば、阿蘇でも諸塚でも、近代の生産技術の発達、生活基盤の整備、流通システムの整備によって、生活は驚くほど楽になった。農林業や家事の機械化は進んだし、肉や魚は村内のスーパーでいつでも手に入るし、週末になれば、若い人びとは車を1～2時間はしらせて近くの都市まで出かけ、買い物や散髪などの用を足して帰ってくる。老人たちに話を聞くと、「昔は朝から晩まで働いても苦しかった。それにくらべて今の生活は驚くほど楽になった」と口をそろえて言う。

一方で、戦後の農政や林政の失敗が、農林業を続けようとする人びとを経済的にますます追い詰めていることも事実であるし、常に指摘されてきたことである。山とともに生きるという強い覚悟のもとで長年にわたって村が生き延びる方法を模索し続けてきた元諸塚村長は、「ほんとうに山村はみじめです」と静かに話す。

「（外部からのアドバイザーのなかには）焼畑を復活させて都市との交流事業をすればよいと気軽に言うものもいますが、いまの生活のなかでそれをするのは大変です。よそから見た山村のイメージとここの生活には大きなギャップがあります」「（高校に行かせるためには月に5万円の仕送りが必要になる。現金収入が極めてすくない状態で）子どもを養うためには出稼ぎに行くか山にあるものを金に変えるしかない。世の中の情勢を恨んでもしかたないのですが、今のままでは山村から人が減ってゆくのは確実です。そのなかで、せめて、ここで暮らそうと選択する人だけは全力で守らなければいけないと思う」。

このような現実を考えると、前述の農山村の人びとの怒りは、都市や他産業とのあいだの構造格差に対する不満や不安として理解することも可能であろう。そして、それにどのようにこたえるかは重要な政策課題でもある。しかし、本稿では、もうすこし、人びとの漠然とした不安や怒りにこだわってみたい。というのも、不思議なことに、人びとからは、上記のような農山村の現状から想像できるような暗さや悲惨さは感じないからである。その淡々とした暮らしのエネルギーが、何に支えられているか知りたいのである。

人びとは、都市と比較した場合の「不足」のみに不満を感じているわけではない。過疎化につ

いては、「山は時代によって養える人口が異なるのだ」という。そして山村の景気がよかった時代には多くの人を養うことができたが、現在の状況ではむしろ人は減ったほうがよいのであり、行政は、観光施設を造ったり人を増やすことよりも今の生活を充実させることに努めるべきだという。

また、住民のほとんどは村外で数年以上過ごした経験があり、都市の便利な暮らしも経験している⁽¹⁾。したがって、都市の若者と同じように、生まれた家や土地とは関係ないところで就職活動を行い、都市に就職することも可能である。にもかかわらず、村に戻ることを決意し納得したものたちである。その彼らが、「われわれは都市のような便利な暮らしをしたいわけではなく、ただこれまでのような暮らしを無事に続けたいだけだ。無事に続けるために闘わなければならないのだ」とも言う。

これらのことから考えるなら、人びとの怒りの根底にあるのは、経済的な収入や物理的な生活基盤（道路や水道や売店、病院などの施設）の構造的不平等のこのみでないことは明らかである。ここで問わなければならないのは、「無事に暮らす」ということの意味である⁽²⁾。

2.2. 生活の変化

農山村の暮らしをみるうえで重要なポイントになるのは、それらが直接的に自然とかかわることである。農業の技術について論じるなかで、守田志郎（1976）は、農産物をつくるという行為が材料を加工して工業製品をつくるように「つくる」というのとはまったく意味が異なるという。農作物をつくるということは、人間が子供をつくるのと同じように、自然の力を借りてつくる＝できるということであり、土地や自然とのかかわりが、直接的な影響をもつという営みなのである。

ここでは、自然とのかかわりという点から、農林業を営む側の農山村、阿蘇や諸塚村の生活の現状について見ておこう。

阿蘇⁽³⁾は昔から水田を中心とする農村であった。火山灰でやせた土地を耕すために牛馬が必要であり、その餌や水田の肥料として大量の草が必要であった。したがって阿蘇では、水田耕作のために、人と牛馬と水田と草原が有機的に結びつき、常に互いに働きかけあい続け、その結果として美しい草原景観が維持されてきたのである。ところが1960年代になって機械や肥料の発達によってこれらの循環が断ち切れはじめたときから、「草原の危機」、すなわち草原の森林化や草原のリゾート開発がはじまった。

このように、阿蘇では1人の人間がつかう範囲を考えるなら土地や資源のあいだの循環は断ち切れているのであるが、農家はあいかわらず水田と草原を行き来している。毎年早春になって草原の野焼き⁽⁴⁾が終わると、ハウスでイチゴの摘み取りをしながら、稲苗の準備を始め、5月の田植えまで戦争のような日々を送る。秋の収穫期になると、イチゴの定植と稲の収穫期、草原での草刈り（冬の飼料）が重なり、ふたたび忙しい日々になる。水田ではトラクターや稲刈り機で作業を行い、その前後の朝や夕方には、牛の世話をするために車で草原まで上ってゆく。同じことが毎年繰り返され、米やイチゴや牛たちとの時間が循環する。そして、生活のなかには、それに沿うように、野焼きや防火帯づくり⁽⁵⁾、祭りや集落の行事が織り込まれているのである⁽⁶⁾。

このような生活がかつと違うのは、現在では、兼業農家になって勤めに出るものと、専業で

藤村：「在地性」の視点から農山村を考える

牛や米を養いながら暮らすものとのあいだに、土地とのかかわりの密度やリズムのズレが生じ始めていることである。

一方、諸塚村は、地形や交通事情の制約によって大規模な農業の近代化や単作化が不可能な土地である。かつてから焼畑や狩猟のほか、林業や運搬などの臨時的な賃労働も含めた多様な営みによって生計をたててきた。1戸当たりの平均保有面積は森林約20ha、耕地約0.3haで、現在においても住民の大半は林業を合わせ営む農家である。米や杉・ヒノキなど、単一商品化や工業の導入促進政策（農村地域工業導入促進法）の波にはのらず、独自の方法で生き残ろうとしてきたことで有名である。戦後、「林業立村」を掲げた村行政は、集落や山を網の目のようにつなぐ道路網の開設、土地の村外移動防止システムの遂行、自治公民館⁽⁷⁾あげての山林・椎茸・茶・畜産の4部門の複合経営を推進してきた。現在でも多くの家が、茶、椎茸、牛、林業の4つのうちのいくつかを組み合わせた経営を行っている。

その結果として、山は杉・ヒノキと、椎茸の原木である広葉樹がモザイクのように入り組んだ複層林となって独特の景観をつくり、川では今でも天然の鮎やヤマメなどの魚がよく釣れる。

諸塚村の1年は、春の田植えからはじまり、茶摘み、椎茸の収穫、下草刈り、米の収穫、間伐と、季節に応じて作業が巡ってくる。この他にも、たとえば嫁がトマトや花のハウス栽培を行ったり、婦人たちの加工（味噌やこんにゃくや茶）、男性たちの土木作業（伐採など）など、臨時の稼ぎの手段は多様である。

さらに、諸塚村で驚かされるのは、その合間に行われる活動の範囲や多様さである。人びとは、地元の山はもちろん、九州全土の山をかけめぐり、春は山菜、6月にはイワタケとり、7月ころからは川でヤマメ釣り、9月には4~5人のグループを組んで蜂の子とり、11月から2月は猪狩りと、山に通う。かつて猪狩りが水田の害獣退治でもありそれ自体が重要な生活の糧でもあった時代から比べると、現在の猪狩りや蜂の子とりは趣味になったかのように見えるが、それは経済的なウェイトの問題であり、人びとはこれらの活動にも、山や耕地での農林業と同じくらい時間も手間もかけ、大切なことだと考えているようである。田植えの作業中であっても、雨上がりの条件のよい日には、川に呼ばれてヤマメをとりに行く。また、現在のように猟期が定められる以前は、猪を見たという合図の法螺貝が響き渡ると、山のなかからどこからともなく男たちが集まってきたという。60代後半の男性は、子供のころに人恋しくなって、法螺貝をふいてしまった思い出を語る。自然とのかけひきをするために、常にそれに対処する時間と緊張感をもっているのである⁽⁸⁾。

以上のような自然とのかけひきとともに、山村の暮らしのリズムを最も身近なところで感じさせるのは、月に一度くらいの割合で巡ってくる小さな祀りの行事である。たとえば、諸塚の行政が把握している最も小さな生活単位である小集落（実行組合とよばれる⁽⁹⁾）のひとつをとりあげると、数軒の単位で、正月、初午、稲荷、水神祭り、十五夜、山の神の祭り、忘年会……と、年間に何度も集まり、祀りを執り行い、共に飲食をする。水神や山の神を祭るとほんとうに事故がなくなるという。とくに山の神への配慮は、人びとの日常の行動のなかにしみついている。みなで飲食をする機会があれば、それがどこであってもまずは山の神に酒をささげる。猟や林業の仕事でヤマに行くときも、忌み言葉をはじめとして、守るべき作法が数多く存在する。山に囲まれ、山のなかで暮らしてきた村では、祈りと生活は密接に結びついている。集落は、神々や祠に囲ま

れ、その結界に守られるようにして立地している。そして、その祈りが型になって、その型のなかで1年がめぐっているのである。

このような、阿蘇や諸塚にみられる利用秩序や空間の意味づけ、山にたいする作法など、さまざまな次元での自然とのかかわりをみると、そこには、1つの社会的なまとまりが見えてくる。研究史をふり返ると、農山村の人びとがこのように「無事に」暮らすためのしくみは、システムとしてのムラという視点からとらえられてきた。

3. ムラの領域と資源管理

3.1. ムラの機能

日本の農山村には、生活の単位として、「われわれ」と意識できるような何らかの社会的なまとまりが存在してきたということ、そしてそれが現在においても完全に消滅したわけではないことは、実感としてほとんどの者が否定しないであろう。このようなまとまりは「ムラ」と呼ばれ、研究や政策の対象としてさまざまな側面から定義され、意味づけられてきた。

たとえば、必要に迫られてムラの範囲（輪郭）について考えてきたのは、農業集落調査である。そこでは、当初、人と人との社会関係、生産と生活の共同体という側面からムラがとらえられた。1955年の最初の農業集落調査（農水省）における「集落」のとらえ方は、「農家が農業上相互にもっとも密接に共同しあっている農家集団」であり、「各種集団の活動状況から、農業生産面および生活面の共同の範囲を決めた」（農林水産省統計情報部、2002：3）という。

ところが、1970年の集落調査になると、集落は、「一定の土地（地理的な領域）と家（社会的な領域）とを成立要件とした農村の地域社会」（同：3）とされ、属地的にとらえられるようになる。1970年に行われたムラの領域調査の結果を分析した川本彰は、ムラ（集落）が自分たちの領土をはっきりと意識して管理する主体であることを発見する。

この事実をうけて、川本は、領域の存在というところからムラの社会関係も説明しようとする。すなわち、領域という有限の土地があるならば、そのなかで農業を営むためには、限られた資源をめぐる個々人の競争とともに、水利などの共同も必然的に生まれてくることになる。だからこそ、人びとの共同性が生まれるとともに、むらのメンバー（土地へアクセスする権利）は限定される必要があり、土地所有の大小と家々の社会関係は密接に関係し、資源の配分をめぐる家々の社会秩序が必要となる（川本、1986）。このように、領域という有限の土地を前提として見るなら、そこに、有限の土地をめぐる関係の発生という意味での「稀少資源をめぐるポリティクス」（佐藤、2002）が、たいへん明瞭な輪郭をもって見えてくるのである。川本は、それら全体を調整する発言力が、農地を中心とした領域全体の保全主体としてのムラだという。

このような考え方は、ムラにたいする評価も大きく変えることになった。都市に食糧を供給する場として農村をみる立場や、農林業生産の増大が農村の相対的な貧困の解決につながると考える立場にとっては、ムラは生活組織＝生産の組織（単位）であった。ところが、農地管理主体から環境管理主体へと関心が移るにつれて、「一定の領域に規定された関係の総体」へと、ムラのとらえ方が大きく変わった。

藤村：「在地性」の視点から農山村を考える

かつての農政にとっては、生産空間（＝モノとしての農地）を存分に活用するためには、農村の人間関係や土地所有のあり方は近代的・合理的な農林業経営を阻む旧慣や遺制であるにとらえられ、ムラは解体すべき対象とされた。しかし、領域論的な発想が可能になると、米余りという問題に直面していた農業論壇は、議論の焦点を、米の生産調整や農業の規模拡大（農地集積など）にムラのもつ調整機能を活用しようという方向へと転換したという（玉，2002：146）。それと同時に、ムラは、地域の資源管理や国土保全という視点からも注目されてゆくことになる。というのも、それまでの村落研究が主に、地主と小作の関係などむら内部における資源配分のあり方や土地をめぐる家々の秩序という関心から土地を見ていたのに対して、ムラによるムラ全体の領土保全（領土全体へ発言力）という着眼は、里、水田、山のあいだになりたつ生態学的バランス（農業を媒介とした資源の循環）の保全管理主体としてムラをとらえることを可能にしたからである。

3.2. 資源管理論の限界

しかし、以上のような、有限の土地を前提としたとらえ方をするなら、以下のふたつの点において、現在のムラにおける人と自然の関係をとらえることが困難となる。

まず、第1に、ムラというまとまりのとらえ方そのものである。たとえば、阿蘇の場合は、草原とのかかわりを考えると、入会集団としての1つのムラの輪郭がみえてくる。しかし、諸塚のような山村の場合は、異なる。山村では、実にさまざまな単位で土地とかかわっている。

たとえば山の管理についてみると、実行組合単（小集落）位で共有山を持っているところも多い一方で、農作業の共同は、実行組合や自治公民館の範囲をこえて、親戚どうしで行うところが多いし、カヤ場などは実行組合に関係なく、数人単位の共有山になっていることも多い。林業の作業を請け負うグループ、猪猟、蜂の子とり、山菜や茸の採集に行くのは、近隣の集落に住む仲間同士である。

ある自治公民館をみると、そのなかに6～10戸からなる5つの実行組合があるが、道の管理も公民館単位で行う。春には公民館のメンバーみなで旅行に行く。資源の管理という点では、公民館のなかには2つの大きな地区に分けることができ、カヤ場であった2箇所（4町、10町）をそれぞれ共有山として管理している。また、数名の共有地に神社が造林をした場所もある。複数の公民館にわたる、38人持ちの記名共有の山もあり、利益を分配しているところもある。

また、別の公民館では、田植え組合と葬式組合と普請組合があった。この3つは完全に重なってはいない。ここには実行組合単位の山はなく、実行組合を超えた範囲での19人や16人単位の共有の山は多いという。神楽や臼太鼓、団七踊りといった人数を要する祭りにおいては、その構成メンバーの空間的な枠組みはさらに流動的で複雑である。

以上のように、諸塚では、生活や生産にかかわる集団が数多く存在し、地理的に制限されながらも、それがさまざまな広がりをもっている。公民館、実行組合、農業の加勢をする組、山仕事の組、共有山を持つ4、5軒から16、7軒のグループ、葬式組、猟のグループ、祭りをを行う単位、小さな祠や稲荷を祭る単位。それらが微妙にずれながら、新しいことが始まると新しい枠組みをつくる。一軒の家をとりあげると、1人1人がさまざまな範囲にある組織や趣味のグループに入っているのである。自分がふるさとだと認識する範囲を訪ねると⁽¹⁰⁾、諸塚村という広い範囲か

ら、実行組合の単位まで、個々人の行動範囲によってさまざまである。

以上のことからいえるのは、このような山村では、人間関係をとっても土地との関係をとっても、それぞれが多様な重なりをみせ、領域をもった1つの完結したムラの姿は見えてこないのである。

また、環境管理や資源管理といったムラの諸機能や評価という側面をみても、伝統的なムラのシステムについて事例研究を積み重ね、その重要性を指摘することができる一方で、現実のムラについてはネガティブに描くことしかできない（藤村，2002：90）。というのも、生産組織としてのムラという視点や、それを前提として成り立つ領域論が有効なのは、みなが耕地や採草地や山林を必要としている場合である。それに対して、肥料や燃料が購入されるようになり、ムラのなかで農家率が減少し続けている現在のムラは、もはや循環的な土地利用という意味ではひとまとまりの管理「主体」としてとらえることができない。地域ぐるみでの循環型農業や有機農業の実践など、一部の動きが賛美されるようになる一方で、その他多くの、過疎化するムラ、農業からはなれるムラ、開発するムラについては、集落による管理機能の衰退を指摘し、それにかわる新たなシステム（都市との連携など）の必要性を説くという図式を反復するしかないのである。

機能をみるかぎり、同じことは繰り返される。ムラは、「結果として」さまざまな潜在的機能をもつということが発見され、その肯定的な面が取り上げられてきた。しかし、すでに見たように、有限の土地や生産を前提とした機能という点からみるなら、阿蘇のように土地とのかかわりが変化しつつある農村や、諸塚のように多様なかかわりをもった人びとの暮らしをすくいとすることはできない。

そもそも、自然に目的はない。そして、「生命・生活原理」（徳野，2002）も、それ自体には目的がない。とするならば、少なくとも、これまでのような生産を中心とした機能や目的でムラを説明できなくなりつつある現在、農業や土地とのかかわりについて、どのようにとらえることができるのであろうか。冒頭に述べたような、「生命・生活原理と経済原理の対立構造」や、農林業に携わる人びとの怒りや違和感は、何にもとづくのであろうか。

それを考えるヒントになるのが、田中耕司の「在地」という概念である。農林業や山村の暮らしの特徴は、それが自然と直接かかわる営みだということである。田中はこのことについて、「農の営み」は、それ自体が農業生産だけでなく村の生活空間全体のたたずまいも暮らしのリズムもつくりだしてきたという。田中は農業のこのような特徴を「在地性」とよび、次のように説明する。「在来農業の技術がちょうどそれが営まれる『場』に則した技術として成立しているように、『農』のある暮らしもまたその地域の自然を暮らしのかたちとして取り込みながら営まれている。……（農業は）、その地域に『在る』もの、そしてその地域の暮らしとともに『在る』もの」（田中，2000：17）である。

本稿の関心に即して言いかえるなら、「在地性」とは、物理的・具体的な土地との直接の結び付きのことであり、それを通して生活全体の共有がもたらされるような農林業の性質のことである。後述するように、物理的な行為のくり返しが意味をもつのも、このような性質が背景にあることと無関係ではないだろう。

藤村：「在地性」の視点から農山村を考える

4. 繰り返しの力

4.1. 人が残る村

諸塚では、物理的な条件としては他とかわらないにもかかわらず、他の公民館とくらべて若者が次々と戻ってきて人口が減らないところがある。その理由を問うと、外から見るものはみな「あそこは神楽があるから」と答える。

山村の生活様式が都市化して、山の暮らしのなかから出てきた祈りや所作と密接に結びついてきた神楽が、生活のなかの所作とは直接的に結びつかなくなることを危惧する研究者もいる。たしかに神楽の所作は、弓矢を用いた狩猟や鍬や箕を用いた農耕であり、現在は農業や狩猟を行っている者にとってさえ、遠い昔の所作であろう。しかし、本稿で注目したいのは、高齢化し、生活や農耕の様式が変化しても、神楽が繰り返されるという事実である。

九州山地の、阿蘇から高千穂、椎葉、米良にかけての山村には神楽の伝統が残っている村が多い。諸塚村でもかつてはほとんどの地区で独自の神楽が舞われていたというが、戦時中にほとんどが途絶え、その後復活したのは10程度である。夜神楽の多くは、12月から2月にかけての寒い時期に行われる。見せることを意識したものではないため、衣装や面も地味である。神楽は、舞の奉納だけでも昼の1時すぎから始まって翌日の朝10時ころまでは続く。一月前からの夜の稽古、前日からの舞台づくり、料理の仕込みなどを考えると、膨大な時間と労力を注いでいることがわかる。

全部で33番あるという舞は、1つの舞が30分を超えることも多く、祝子（神楽の舞い手）は、酒で身体を温めながら一睡もしないで舞う。舞によって見せ所となる動きは異なるようであるが、その底流に流れている足の動きのリズムは一定で、それが一晩じゅう繰り返される。延々と繰り返される足捌きやゆっくり揺れる衣装をみながら眠気と寒さで意識が朦朧としてきた者は、毛布にくるまって寝ている。

神楽のクライマックスは、天照大神が天岩戸から姿を現す瞬間で、そのシーンがちょうど夜明けごろになる。みなが神楽の筋を知っているので、夜が白々と明けるころになって天岩戸が開けられる瞬間が近づくと、けだるい雰囲気にも包まれていた宿全体に緊張感がみなぎってくるのがわかる。アメノウズメのゆっくりした舞いが終わり、いよいよ岩戸から天照大神が引き出されると、それまで息を吞んで見つめていた人びとは、大神役の子供が無事に務めを果たしたという安心感と、岩戸から神が出たというありがたさから、今年もまた感動の渦に包まれるのである。

天照大神を舞うのは4歳から7歳くらいの男児であるが、人びとは、「天照大神の役をした子はたいていこの村に残って、大人になっても神楽を舞い続けるものだ」という。ある年、肝心の天照大神が、泣いて家から出てこないの、神主は祝詞をあげ続け、岩戸から導き出すウズメは1時間以上も舞い続けていたことがあった。見ている人々は「子どものことだから」といいながら笑って待っている。しかし、待っても子どもは機嫌をなおさず、3歳の子供が代役にたてられることになった。

驚くのは、周囲の大人たちが、「役にあたっていたはずの子は舞台に上って天照大御神の役をする怖さを感じているからできなかったのであるが、代役になった3歳の男の子はまだ小さくてそれがわからなかったからできたのだろう」と説明することである。前の週に自分たちの神楽を

終え、向かいの谷のからやってきた青年は、酒を飲んでいても舞台に立つと身が引き締まり、ずっと酒がひくという。

年に一度の神楽は、人々の心が1つになるのを、観光客でさえ実感できる瞬間である。神楽に魅せられて10年以上も熊本から通い続けているという男性は、はじめて来たとき、神楽を見守っていた人びとがみな天照大御神の登場の場面で感極まって泣いたことに驚嘆したという。

神楽には、親戚縁者や古い時代から互いの祭りを訪問しあう地区の人たち、村の役職者から、神楽好きの観光客や写真家や民俗学者など、毎年おとずれる常連たちもいる。そういう観客たちも含めて、現場に立ち合った者は、毎年おなじことを繰り返しながら、毎年あらたに感動するのである。

ほとんど寝てばかりいる老人でも、神楽の日には起き上がってきて、太鼓を打ち始める。ある程度の年齢になると、太鼓の音を聞くと、足が勝手に動き出すという。年に一度の夜神楽の日だけではなく、祈願ごとや祭りごとがあれば舞われる神楽は、人びとの身体に染み付いたリズムとして伝わっていくのである。そして、それが神楽をみる者に、ここがいつの時代かわからなくなるような感覚を覚えさせる。

当然ながら、神楽の準備のわずらわしさに嫌気がさしている者や、舞うこと自体が好きではない者もいる。また、家々で回りもちで行われていた神楽が、集会所もかねた共同の神楽殿で舞われるようになる傾向も強い。

しかし、この地で生まれた子どもたちにとって、自分たちは神楽のある地区に生まれたのであり、ここで生まれたかぎりそれを舞うことも当然のことだと感じているのも事実である。長老は、ここに住むということは神楽を舞うということなのだと力説する。過去からずっと続けられてきたことがこれからも続くことは当然だと考えられているのである。

4.2. 在地性と時間

神楽の話を長々と述べたのは、土地とのかかわりや「在地性」を考えるうえで、神楽にみられるような「繰り返し」が、大きな意味をもつと考えられるからである。すでに述べたように、川本の領域論は、耕作を中心として有機的に結びついた「領土」の存在によって、ムラの人間関係や所有関係の根拠を説明する。しかし、領域意識の存在を前提とした資源管理論にもとづくと、水田農村とは異なった山村や、生活様式が変化したり混住化がすすんだムラをとらえることができないことはすでに見たとおりである。

山村での暮らしのなかから独自の哲学を打ち立てようとする内山節は、時間という変数をいれると、それとは逆の論理になるという。「関係が存在をつくりだす」側面がみえてくるというのである。人間の存在というものは関係性によって生み出され、関係性のなかにあるものだということとはよく言われることである。すなわち周囲との関係があるから、それと区別をする自己が生まれるのである。時間という変数を入れて考えると、物理的に定まった境界がはじめにあるのではなく、ムラ人相互や隣接するムラにむけて、ある一定の働きかけ（利用）を繰り返すことによって、人と土地がその関係性を維持していくという側面が見えてくる。したがって、その関係の在り方が変われば、領域も変わるということになる。近年の資源管理論を見ると、人びとは自然や人間への働きかけという行為によって、ムラという場を生み出していることが指摘されてい

藤村：「在地性」の視点から農山村を考える

る⁽¹¹⁾。

内山はさらに、時間には縦軸の時間と横軸の時間の2つがあるという。縦軸の時間は過去から現在に直線的に流れる不可逆的な時間であり、資本主義を支配する時間である。それに対して、横軸の時間とは、朝から夜になり再び朝がくる、春から冬になり再び春になる、生き物が死んでまた子どもが生まれるという、自然の円還する時間である。「自然と結びついた労働や暮らしのなかでは、あるいは自然との共時的な場を形成するなかでは、横軸の時間が支配的な時間軸になり、縦軸の時間が支配する社会との結びつきのなかでは縦軸の時間に依存」（内山、1993：32）しながら、それをうまく調和させて暮らしてきたというのである。

直線的な時間のなかに身をおくということは、自分の一生を合理的に経営（管理）するという感覚を生み出す。そのなかでは、あらゆる行為や出来事は、（顕在的にせよ、「結果として」にせよ）ある意味や目的をもってそれにむかって動いていく。

このような資本主義の直線的な時間に直面したときの対応は、農村と山村とでは相違があると内山はいう。商品経済が浸透してくると、農村は劇的な変動をとげていったのに対して山村は、営農条件の不十分さもあって自給自足ができず、古くから商品経済が浸透していた。そして、そのことが、縦軸の時間を、横軸の時間（ムラの暮らし）のなかに調和させていく巧みさを村人に成立させていたという。山村は、「伝統的なムラの時間を完全には消滅させず、縦軸と横軸の二重の時間世界をつくりだした」（内山、1999：91）のである。

このような時間のとらえ方は近代的な「個」についての議論にも接続してゆく。たとえば、都市の市民は地縁血縁関係や、土地との関係において、自立した「個」であり、それらがネットワークを結んで人間関係を形成していく一方で、伝統的な農村は人間関係や土地との関係のなかで「個」の発現が制限・抑圧されている。そして、地理的障害の減少や人の移動、資本主義経済の浸透につれて、農山村の人びとも「個」として自立した人間関係を結ぶようになるという考え方がある。

しかし、この内山の議論は、そのような単純な二分法とは異なった視点を導入する。内山は、その2つのあいだに、自然との関係＝「在地」という視点を入れるからである。農林業など、自然と強く結びついた労働に従事するものは、横軸の自然の時間に合わせてそのなかで自己の労働を確立するのであるが、どのような時代の人であっても、その一方で、その働きかけを通して自然を対象化しているという。そして、それが「個」の意識を確立する。内山は、どのような古代であっても、人間はこの2つの時間の矛盾のあいだに存在するものであり、この縦軸の時間と横軸の時間が矛盾しながらも全体で生活の時間を形成し、使い分けられていたというのである。

このように考えると、農山村で暮らそうと決めた人たちは、横軸の時間を生きようと決意する人でもある。神楽を舞い、山仕事をする人たち、阿蘇の農村に戻ってきた人、彼らは、無事に楽しく生きることが目的だという。それは、縦の時間のなかでみると「努力しない」「上昇志向をもたない」人たちにみえるかもしれない。目の前の暮らしの困難を避けようとはするが、収入を増やしたり、富や名誉を手に入れて出世することを望んでいるわけではないからである。

諸塚で、新しいかたちで都市との交流を試みている職員は、自分たちが企画するプログラムと、毎年新しいものを導入する「イベント」を比べて、「自分たちの生活をそのまま見てほしい。生活というのは繰り返したから毎年同じことを繰り返してもよい。それでも来る人だけが来てくれ

ればよい」と述べる。

諸塚では、自分の山を育て、声がかかれば作業班を組んで伐採に雇われて稼ぎ、その日が来れば祭りを執り行い、神楽を舞う、そして、猪猟や蜂の子とりのスリルや充実感に夢中になる、仕事の区切りには近くの仲間と一杯やるといった、伝統的な暮らしのスタイルが続けられている。かといって古い生活スタイルに固執しているわけでもなく、新しい機械や新しいものが手に入ればそれを使い、川の土手や畦は適度にコンクリート化する。そのような人たちは、同じ季節や同じ仕事を繰り返し、同じ神楽に毎年感動する。

伐採作業のあとで一杯やっていた男性たちは、猟や伐採、神楽を舞うときの真剣さや村政についての議論とは打って変わった明るさで、「サラリーマンと比べたら俺たちは昇進もしないし何の進歩もない。町の人みたいな向上心なんてない。このままずっと一生、好きなことだけやって、暢気なもんよ」と笑い、「でも、みんながいて、仕事が終わったら誰かが釣って来た魚をあてにビールを飲む、この暮らしが楽しい」「楽しい暮らしを守ることが今の世の中でいちばん大事なのだ」と口々にいう。諸塚村の人びとに比べると同じ農業でも数倍も条件がよいと考えられる阿蘇の農家が、田畑や牛をどんどん売っていった仲間や、規模拡大する農業のやり方について、「暮らしに余裕がなくなった。みなさんの心にも余裕がなくなってきた」というのとは、対照的でもある。同じ側面は諸塚の中にもある。元村長は、行政や人びとが「都会ばかりに目をむけた考え方」におちいることを警戒しなければならないと言う。

しかし、それと併行しながら同じムラの中で人びとは、それぞれのかかわり方や行動範囲によって、それぞれに山を意味づけ、それぞれの生活を営んでいる。そのなかで、ムラを支えているのは、繰り返し行われる神楽、巡ってくる季節にあわせて繰り返し行われる田畑や山での作業、そして、その繰り返しを当然のこととして受け入れる人びとの力（余裕）である。徳野がいう「経済原理」が生産量や収入の増加という目的をもつとするなら、それは目的がなくても存在できる世界でもある。ひとつの目的や機能による評価とは無縁であるからこそ、多様なものが存在できる。阿蘇の農家は、そのことを「負ける勇気」と表現する。いま農業を続けていくためには、「経済原理」にもとづいた競争に、あえて負ける勇気が必要だというのである。

方向性をもった運動を何もしないということ、何もしないが自分たちの暮らしの「無事」を守ろうとすること⁽¹²⁾は、「とどまらない」ということでもある。同じことがムラをとらえる視点そのものについても言える。時代に応じてムラがある特定の機能をもつのは当然であろう。しかし、ムラをめぐる現実には常に動き続けており、たとえば土地の意味や価値についても常に変わっている。ある機能（固定された定義）を前提にして議論が回り始めると、その前提にもとづいた評価の基準で村々を比較できるとしても、現実のムラを前にすると、ムラの崩壊を論じるか、予定調和的にしか描けなくなり、現実とのズレが生じてくるのである。

注

- (1) 現在18歳以上の7割以上は、高校の3年間、あるいはその後の就職も含めた数年間は村外で生活した経験をもっている。
- (2) 内山節も、『ローカルな思想を創る』農文協（1998）のなかで「無事」という言葉を持ちいて、山村

藤村：「在地性」の視点から農山村を考える

の暮らしについて述べている。また「無事」という概念については、NHK の放送番組における鳥越皓之との対談のなかでも展開されている。

- (3) ただし本稿で述べているのは、阿蘇外輪山の内側やその周辺のことである。西部は畑作地帯であり、事情は異なる。
- (4) 野焼きとは、2月に草原に一斉に火入れをして、新芽の芽立ちを促進すること。
- (5) 防火帯作りは、野焼きの際の類焼を防ぐために行う。輪地切りとよばれ、夏に共同作業で行われる。
- (6) 阿蘇の草原保全については藤村（2002）参照。
- (7) 諸塚村の自治公民館の成立過程については、以下に詳しい。
http://www.vill.morotsuka.miyazaki.jp/01home_f.htm
- (8) 松井健は、猪猟や蜂の子どり、イワタケとりなど、山や川での狩猟採集など、「きわめて身体的な、自然のなかに身体をおき身体を媒介として対象物との出会いを求める行為」（松井、1998：169）をマイナーサブシステムとよび、このような活動は、「身体全体を通して自然との直接的な関わりを体験させ、その時その場所において、深く自然につつまれていることを鮮烈に体感させるという点で、さらに突出した意味を記憶の沈殿の深層にもたらす」（松井、1998：170）という。これらの活動の記憶や経験が共有され、祭りのかたちになっていくのである。
- (9) 4～5件から十数件にわたる小集落で、「部落」や「くみ」と呼ばれることもあるが、たいていは地名でよばれる。
- (10) 「諸塚村の暮らしと自治公民館活動についてのアンケート」（2003年）諸塚村自治公民館活動のあり方見当委員会（諸塚村教育委員会、アドバイザー：九州大学 佐藤宣子）による。
- (11) 藤村（2002）を参照。また、家中茂（2002）は、「生成するコモンスター環境社会学におけるコモンスター論の展開—『開発と環境の文化学』樹書林、において、資源管理論の近年の展開についてまとめている。
- (12) 五十川（1999）は、利用や手入れがなされなくなった結果として汚れてしまった堀（クリーク）の再生運動を取り上げるなかで、堀の状態をよくないと思いつつも、行政や外部からの堀再生運動の呼びかけにすぐには答えられない人びとに注目している。ここで描かれている、ムラづくりと結びつけた堀の浄化という方向性をもった働きかけにたいして、ムラの内部の人間関係や堀にまつわる集落の歴史をふまえたうえで、状況を見ながら違ったアプローチから動こうとする人びともまた、「無事に暮らす」ことをめざしているといえる。

文献

- 藤村美穂、2002、「阿蘇の草原をめぐる人びととむら」『年報 村落社会研究 38』農文協。
- 蓮見音彦、2003、「農業集落調査と農業集落の変遷」『村研ジャーナル』18。
- 五十川飛暁、1999、「環境改善運動における住民参加の要因」『3号館フィールド年報』創刊号、佐賀大学農学部。
- 川本彰、1983、『むらの領域と農業』家の光協会。
- 岸康彦、1996、『食と農の戦後史』日本経済新聞社。
- 松井健、1998、「マイナーサブシステムの世界—民俗世界における労働・自然・身体—」篠原徹編『民俗の技術』朝倉書房。
- 守田志郎、1976、『農業にとって技術とはなにか』東洋経済新報社。
- 農林水産省統計情報部編、2002、『2000年世界農業センサス』第9巻。
- 佐藤仁、2002、『稀少資源のポリティクス』東京大学出版会。
- 佐藤宣子、2003、「諸塚村の暮らしと自治公民館活動についてのアンケート 集計結果」諸塚村自治公民館活動のあり方見当委員会（諸塚村教育委員会、アドバイザー：佐藤宣子）。

特集：農と暮らしのディスカール

- 玉真之介, 2002, 「『戦後農政』の転換と農村活性化政策」『年報 村落社会研究 38』農文協.
- 田中耕司, 2000, 「自然を生かす農業」『講座人間と環境 3 自然と結ぶ』昭和堂.
- 徳野貞雄, 2002, 「食と農のあり方を問い直す」『食・農・からだの社会学』新曜社.
- 内山節, 1993, 『時間についての十二章』岩波書店.
- , 1998, 『ローカルな思想を創る』農文協.
- 家中茂, 2002, 「生成するコモンズ——環境社会学におけるコモンズ論の展開——」『開発と環境の文化学』樹書林.

(ふじむら・みほ)

藤村：「在地性」の視点から農山村を考える

Agricultural Life in Local Areas

FUJIMURA Miho

Faculty of Agriculture

SAGA UNIVERSITY

1-155, Honjou Saga-city Japan

We are overcome with a nameless fear about our own food. And many people have begun to be concerned about agriculture. On the other hand, the man who decides to work in agriculture also feels uneasy about his life. This is an environmental problem that concerns agriculture and food.

I think that these two anxieties are related. This is because both agriculture and eating are acts directly connected with nature.

In this paper, I try to describe the life of a peasant with this anxiety. I clarify how anxiety is an environmental problem.

The Japanese rural village has been studied from the vantage point of the agricultural structure or the view of community based resource management. And the rural area has been focused on from a context of economical difficulty in contrast to the with urban area. But these contexts fail to consider minor subsistence and non-economical acts like traditional enshrining.

To see these, one key word is “time”, and another is “locality”.

Keywords : time, resource management, locality